

# 八代市立博物館未来の森ミュージアム 所蔵名品選



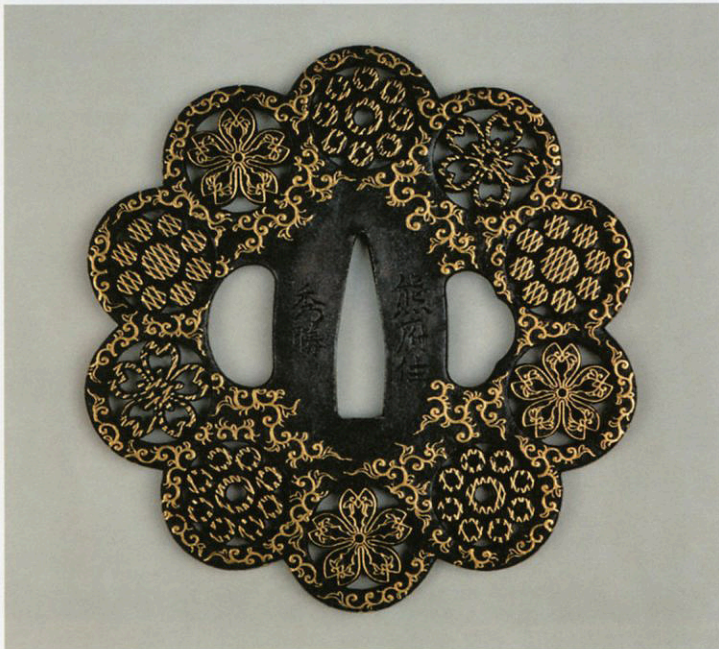
八代焼は、寛永9年(1632)千利休せんりのりきゅうの教えを受けた大名茶人として知られる細川三斎ほそかわさんさいとともに八代に入った豊前上野焼ぶぜんあがの(福岡県)の陶工喜蔵きぞうとその家族が始めたものです。江戸時代を通して肥後細川藩ごとうがまの御用窯たんせいをつとめ、端正な茶器や日用の飲食器を生産しました。素地に白土を埋め込んで文様を表現した「象嵌せき」の技法で、全国的に知られました。明治時代以降には、御用焼物師上野家しのぶのほか数家の窯もおこって今日に伝統を伝えていいます。小代焼せうだいやきとならび、約400年の歴史と伝統を誇る、肥後を代表する陶磁器です。



## 洗練された象嵌ぞうがんの美 [八代焼]

象嵌ぞうがん曆手こよみでに桐紋きりもん銚子しやうし 上野東四郎あがのとうしろう 作 嘉永3年(1850)

肥後鐺あかぬは、垢抜けたデザインと地鉄じがねのよさが魅力です。これは、すぐれた美のコーディネーターであった細川三斎の指導と影響によるものと伝えられています。江戸時代の肥後鐺ひらたは平田ひらた、志水しみず、西垣にしがき、林はやしの四派を中心に製作されました。大胆な透かし彫りや奥ゆかしくも繊細な象嵌せきなど、各流派が独自の表現を追求することによって多彩な作風が生まれ、肥後鐺あかぬの魅力は全国に広まりました。



## 肥後が生んだダンディズム [肥後鐺]

- (右) 三階松透鐺さんがいまつすかしづば 林又七作はやしまたしち 江戸時代前期(17世紀) 熊本県指定重要文化財
- (左) 桜九曜紋透象嵌鐺さくらく ようもんすかしぞうがんづば 秀勝作ひでかつ 江戸時代後期(19世紀)



八代染章が貼られた甲冑



八代染章は、カモシカの皮を加工した白くて柔らかな素地に、型革や型紙を使って、不動明王や獅子・牡丹、小紋などの文様を染め出したものです。鎧や兜、その他の武具などに貼り付けて、装飾に用いられました。全国的には「御免革」の名で知られ、肥後細川藩から幕府への献上品でもありました。明治時代になり武士の世が終わりを告げると、主な用途を失い、やがて姿を消して幻の工芸品となりました。

まぼろし  
幻のブランド品  
やつしろそめかわ  
[八代染章]

てんびょうがわそめかわ  
天平草染革 (天平十二年銘) 江戸時代後期～明治時代初期 (19世紀)



しつき  
質実剛健の漆器

かわまたぬり  
[河俣塗]

(左)足打膳 富岡仲平(二代)作 文政12年(1829)  
(右)盆 富岡仲平(三代)作 江戸時代末期(19世紀)



製品の裏にある黒印

東陽町河俣地域では、江戸時代後期から明治時代にかけて「河俣塗」と呼ばれる漆器が生産されていました。製品は膳や盆、重箱などが主で、透き漆をかけた赤茶色の木地が特徴です。作りはとて頑丈で、名人として知られた三代目富岡仲平は明治10年(1877) 第一回内国勸業博覧会に膳と重箱を出品し、「製造堅牢」として褒賞されています。



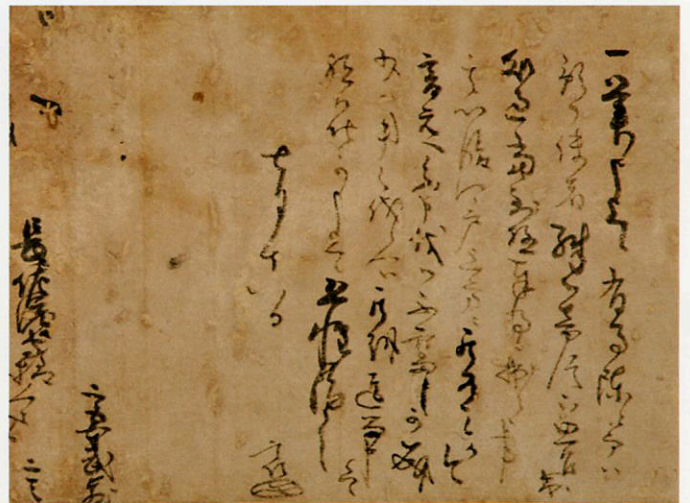


# 和紙、用と美の世界

よび  
みやじわし  
[宮地和紙]

(左)紙子反物 近代 八代市指定文化財  
(右)水玉紙 江戸後期時代~明治時代 (19世紀)

今から約400年前、八代の宮地地域に紙漉きの技術が伝わりました。江戸時代には御用紙漉き職人が、檀紙・奉書紙、水玉紙など的高级紙を生産していました。特に紙子(楮紙で作った防寒用の衣服)の反物は「肥後八代紙子」として『日本山海名物図会』(18世紀)に紹介されるなど、全国に知られた名産品でした。



加藤清正の花押

左は慶長5年(1600)10月に八代を占領した加藤清正が家臣に「八千場(八千把)村」から150石を与えることを示した古文書。右は剣豪として有名な宮本武蔵が、寛永17年(1640)に細川家家老・松井興長に面会を申し入れた書状で、現存数少ない武蔵自筆書状の一つです。いずれも熊本・八代の歴史の1コマを象徴する貴重な資料です。古文書は先人たちの肉声を今に伝えています。

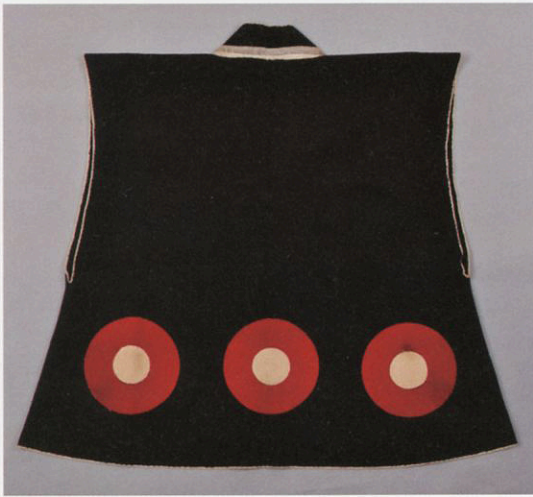


宮本武蔵の花押

## こもんじよ 古文書が語る 先人の肉声

ぶしやう しよじやう  
[武将の書状]

(左)加藤清正知行宛行状 慶長5年(1600)  
(右)宮本武蔵自筆書状 寛永17年(1640)  
熊本県指定重要文化財

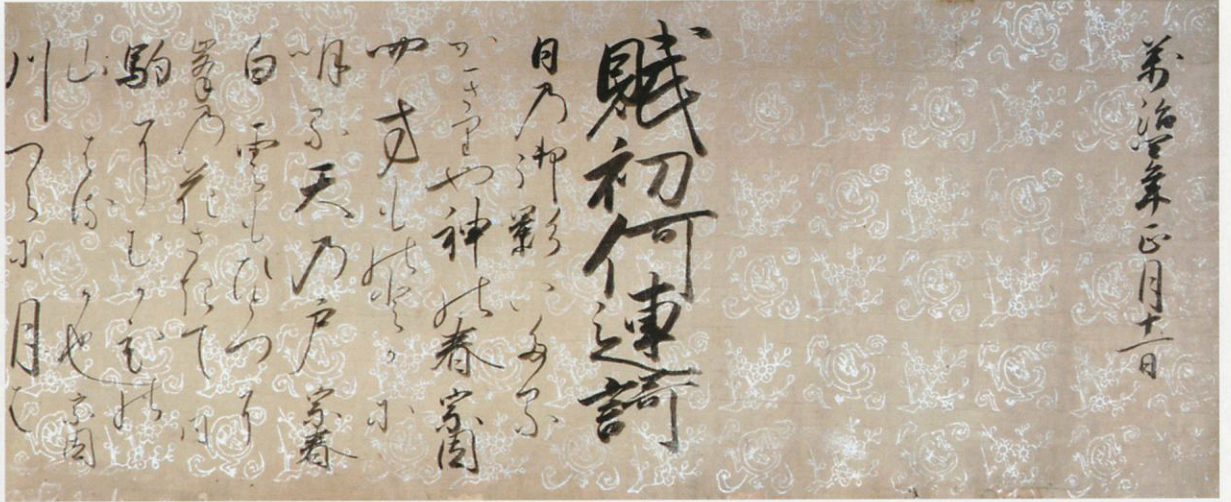


# かとうまさかた いひん 加藤正方の遺品

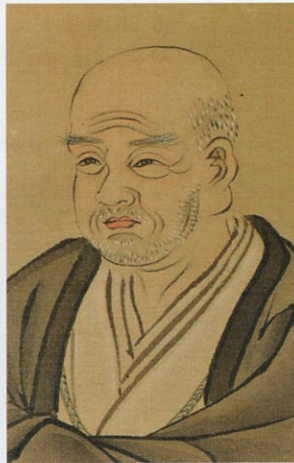
## きよまさ じんばおり [清正ゆかりの陣羽織]

じやのめもんぐらしじんばおり  
蛇目紋黒羅紗陣羽織 桃山時代  
(16世紀末～17世紀初め)

江戸時代の初め、現在の八代城(松江城)を築き城下町を整備したのが、八代城代であった加藤家筆頭家老・加藤正方です。平成22年に正方の遺品が多く確認され、当館に寄贈されました。これはその一つで、加藤正方が主君加藤清正から拝領したと伝わる陣羽織です。舶来品の黒羅紗の生地を大胆に使い、加藤清正の家紋である蛇の目紋があしらわれ、襟元は白木綿のレースで飾られています。華やかな南蛮文化の影響をうけた桃山時代の雰囲気の色濃くただよせる一品です。



西山宗因は、江戸時代の初めに加藤正方に仕えて青年期を八代で過ごし、その後大阪を拠点に連歌や俳諧の世界で活躍した人物です。特に俳諧では談林俳諧の祖と言われ、井原西鶴や松尾芭蕉にも大きな影響を与えました。宗因の作品は、短冊や懐紙などに華やかな紙を使っていることが多く、句と紙を合わせた総合的なコーディネートで鑑賞者を楽しませようとする姿勢がうかがえます。



# 八代が育てた大スター

## にしやまそういん [西山宗因]

- (上)大神宮法楽『賦初何連歌』西山宗因自筆  
寛文元年(1661)
- (左)「ながむとて」句短冊 西山宗因自筆  
江戸時代前期(17世紀)
- (下)『談林六世像賛』より西山宗因肖像  
文化10年(1813)